



原作・表紙 アリスソフト

小説 黒井弘騎

挿絵 桐島サトシ

立ち読み版

第一章	想破上弦衆、閃忍見参！	006
第二章	決戦前夜	015
第三章	突入！ 無限城！	025
第四章	業	064
第五章	呪意（ノロイ）	098
第六章	朽ちた誓い、墮ちた上弦	144
第七章	超昂!! 久遠の果てに	197

登場人物紹介

Characters



たかもり 鷹守ハルカ

ノロイを追い、過去からやってきた忍者集団・上弦衆の閃忍。現頭領であるタカマルを信頼し、そして愛し合っている。



しほうどう 四方堂ナリカ

タカマルの通う武道道場ナンバー1の実力者であり、上弦衆の一員でもある少女。タカマルとは家族同然の仲にある。



スバル

ハルカ同様、過去からやってきた上弦衆の隻腕の閃忍。ノロイ党に捕らわれた過去を持つ。



いくさべ たかまる 戦部鷹丸

上弦衆の23代目頭領として3人の閃忍を取りまとめる。龍輪功という儀式により、相手に淫力と呼ばれる超能力を与える事ができる。

くろがね 黒鉄アキラ

上弦衆の一員。常にノロイ党を追い、戦いにおいては実質的な行動指揮を執る。

むくろい えんさい 骸居炎斎

ノロイ党党首。恐怖により世に安寧をもたらそうという思想「天壤無窮」を唱え、ノロイに魂を捧げる。

ノロイ

炎斎らより救世天王として崇められる存在。人々の嘆き、恐怖、悲しみを種にしている。

グッと尻尾を押し込まれ、突起物に腸粘膜を抉られる。異質な器具に奥の奥まで蹂躪される被虐感に、しかし発情した肉体はマゾヒスティックな快感を覚えてしまった。尻褻すべてが鋭敏な性感帯と化しており、ぐちゅぐちゅと抉られるのがたまらない。意地悪くパイプを前後に動かされ、イボイボで性粘膜を虐められると、もうそれだけで――、

「だめ、だめ、だめえ！ お尻っ、お尻そんなにやにされたら……イ、イク……うう！」

ブシャ、ブシャアアア！ 剥き出された幼裂が痙攣し、濃密な愛液が吹き零れる。鋭敏極まりない発情期のメス猫は、尻尾パイプで尻穴を弄られただけで、あっけなく絶頂へと達してしまったのだ。太ももまでを濡らす愛液は、恥知らずなほど濃い。

「はあ、はあ、はああ……いやあ、こ、こんにゃ。私……お、お尻にゃんかで……」

しどけなく姿勢を崩し、アナルアクメの余韻に震える淫乱くノ一。呂律の回らない嬌声は甘えきつた猫のように可愛らしく、もはや抵抗の意志など感じさせなかった。

「フン、早速達しおったか。メス猫らしく淫乱な肉体だな。今からこの様では後が保たんぞ……さあ貴様たち、このメス猫をたっぷりと調教してやれ」

指示に従い、ゲニンたちが包囲の輪を狭める。勃起したペニスの一本が、柔らかなほつぺたに押し付けられた。さらには何本もの肉棒が、所構わず全身に押し付けられる。

「ヌンジャ……」「ヌンジャ、ヌンジャア！」

獲物を仕留めた肉食獣の群れのように、ゲニンたちは少女忍者へと迫っていく。勃起しきつた男根を所構わず押し付け、幼い少女の柔らかな肌を貪りつくす。

「うあっ……や、やめてっ。い、今敏感すぎるのに……そ、そんなにやに擦り付けないで！」
しゅっ、しゅっ！ 少女の声をまったく無視し、ゲニンたちは欲望のままに腰を振り始めた。紅いコスチュームに先走りを塗り込められ、乙女の美肌に雄汁の匂いを染み込まれる。イヤイヤと力なく振られる童顔にも、容赦なく汚肉塊が突き刺された。

「う、あっ……押し付けないでっって言ってるでしょ……いやあ、か、顔はやめてよお！」
純白の豊頬が、汚らしい亀頭に蹂躪される。少女ならではの柔らかな筋肉が、ぐにと凹まされた。女の命を汚辱される屈辱に、初心な少女はツインテールを揺らし煩悶する。

（い、いやっ！ こんな……ゲニンなんか。この私が、こんな雑魚に好き勝手……！）
メス猫へと落とされながらも、持ち前の気丈さは辛うじて失われていない。本来なら軽くあしらえるはずの雑魚に玩弄され、強気なプライドが軋みをあげる。その悔しさをバネに、ナリカは抵抗心を振り絞り絶叫した。

「やっ……や、やめなさい！ このお……ぞ、雑魚のくせに……ふにやああああっ！」

健気な反抗も長くは続かない。吼えた瞬間、剥き出しの幼乳へも肉棒が押し付けられたのだ。勃起した乳豆を亀頭で摩擦され、稲妻のような快美感が迸る。さらに何度も乳首を擦られれば、あまりの切なさに抵抗の声さえあげられなくなってしまった。

「やっ……だめ、だめえ！ そこっ……そ、そんなにしたら……あああんっ！」
（だめっ……ち、乳首はダメよ。そこ、び、敏感すぎ……！）

未発達な幼肢の中でも一足早く蕾開いた桜色の乳首は、ナリカの弱点の一つだ。その上

メス猫同様に発情させられ、小さな急所はいつそう感度を増してしまっている。そんなところに熱い勃起を押し当てられ、シコシコと擦り付けられ集中的に可愛がられたら――。

「ふあああ、だ、だめ、だめっ！　そ、それダメ……ち、乳首は……ふにやあああん！」

切ない――切なすぎる乳悦が、肉豆をビリビリと震わせる。可憐なヒップを揺らし、甘く悶える牝猫忍者。誘うように動く尻尾がゲニンに掴まれ、悪戯半分には抜き差しされた。

「や、やあつ！　しっぽ、しっぽ動かさないで……尻尾動かすと、お、お尻にやああ！」

いったばかりの腸内をイボ付きパイプに攪拌され、無数の突起に腸粘膜を抉り返される。あさましく嬌声をあげる唇に、ゲニンのペニスがあぐつと押し付けられた。

「うあ……ちよ、ちよつと！　なに汚いの押し付けて……んくううっ！」

お口を汚される嫌悪感に、くノ一は拒絶の声を張り上げた。だがむわつと香る雄匂と、唇を濡らす先走りの味に、そんな抵抗の意志を蕩かされた。じゅわつと涎が溢れ出し、唇は勝手に開いてフランクフルトを迎え入れようとしてしまう。

（う、うわあつ！　おちんちん、す、すごい臭い。なのに……ど、どうして……）

「ご、ごくんつ。はあ、はあ、はあ……お、おちんちん……ふにやああ、あ……あ」

気丈な眼が、トロンと蕩ける。戦慄く唇が締めきれず、涎を零しながらふるふる舌が伸びてしまう。物欲しげな表情は、餌を前にしたネコそのものだ。

「お、美味しそ……あ、ああ？　ダメよ……何を考えてるの、こんなの舐めちゃダメ！」

涎まみれの舌を伸ばしかけたところで、ナリカははつと我に返った。持ち前の負けん気

を振り絞り、必死に頭を揺すって欲情を振りきろうとする。

（で、でも……すぐくたくて、遅しい……。臭いもキツくて、お、美味しそう……！）

理性が働いてくれるのは、一瞬だけだ。理性では拒絶しているのに、猫の本能が目の前のご馳走から意識を切り離させてくれない。煩悶している間にも無数の肉棒に全身を可愛がられ、淫猥な熱と感触とに人としての尊厳を削られていく。

「う、あ……あんっ！ お、おちんちん……そんなに……ひゃ、ん、ん〜！」

「くくく、どうだメス猫。いきり立った雄のモノが欲しくてたまらないのだろうか？ よいのだぞ、ケダモノらしく欲望に従い、はしたなく餌にむしゃぶりつくがいい」

「はあ、はあ、はあ。そ、そんなに……欲しいにやんて……はにゃあ……ん、ん……」

ナリカは幼くとも、立派な一人前の忍だ。己を厳しく律し、精神を保つ術を知っている。だがそんな忍者の克己心をもってしても、湧き上がる衝動を抑えるのは不可能だった。

（ううっ……ど、どうして？ 悔しいのに……おちんちん、欲しい。いやっ……こ、こんな雑魚のおちんちん舐めるなんて、死んでもゴメンなのに……！）

逆らえない——鼻を突く香りも、とろっとした先走りも、遅しいカリの感触も、どれもこれも魅力的すぎる。理性を無視し、無意識のうちに小さな舌が唇から伸ばされていく。

「そうだ。しゃぶれ……猫のようにあさましく、下賤なゲニンの肉棒に口付けるのだ」

「う、うああ……だ、だめえ。流されちゃだめよお……こ、こんなヤツのにゃんか舐めちゃだめえ。イヤよお、こ、こんなにや事したくないのに……ちゆる、んちゆるっ！」

屈辱に流されながらも、本能に逆らえない。真つ赤なペロが、差し出された亀頭に絡みつく。大量の唾液と先走りが混じりあい、いやらしく糸を引きながら口中へ流れ込んだ。

「んっ……ご、ごくっ。ふにゃああ……お、おいし……にゃあああ〜ん!」

瞬間、お口いっぱいに広がる——たまらないほどの幸福感。

「にゃ、にゃにこれ……はむ、んちゅ、んちゅっ! か、身体が熱くなつて……はむう、んちゅ、ちゅるっ。甘くて……はにゃあああ、お、おいしい……こく、こくん!」

まるできつい酒を飲んだかのように、身体の芯が燃えるように火照りだす。鋭敏な感覚器官で味わう雄の味に、童顔を綻ばせる牝猫忍者。もはや舌先でしゃぶるだけでは満足できず、はしたなくお口を開き、上半身を乗り出してフランクフルトにむしゃぶりつく。

「んぶっ……お、おいし……にゃあ。やあああ……お、お口、止まらないにゃあ……」

くちゅくちゅ、ペロペロ。ミルクを舐める子猫のように、可愛らしくも貪欲な舌使いで雄棒をしゃぶり吸う。そのたび身体が内側から熱くなり、思考がピンク色に醗酵していく。アナルに突き刺された尻尾は、嬉しそうに左右に振られていた。

「クククク、たまらんだらう。そやつらの性器には、メス猫の好むマタタビエキスをまぶしてある。発情期のメス猫には決して抗えぬ、最高の媚薬だ」

「ふにゃああっ!? そ、そんなに……ねこにマタタビにゃんで……ひ、卑怯……んちゅ!」
卑劣な手段に憤るも、言葉を漏らす時間さえ惜しく、少女はひたすらに精液をねだり続けてしまっていた。心身ともに牝猫に墮した今のナリカにとって、マタタビの効果は絶対

的なのだ。ただでさえ発情しきっていた肢体はいつそう感度を増し、ゲニンたちの淫根摩擦にこれ以上ない快美を感じていた。火照りきつた肌をペニスで擦られるたび、ゾクゾクする快感に四肢が痙攣する。乳首をクリュクリュと可愛がられれば、意識が飛びそうなほどの快楽に背筋まで反らして感じ入ってしまう。

「ふにゃあああ……らめ、らめ、らめえ！　そ、そんなにしにやいでえ……からだあちゅひのに、び、敏感すぎるのに……お、おちんちん擦り付けちゃだめにゃのおお〜！」

怖いぐらい従順な身体を大好きな男根に可愛がられ、歡喜の声をあげてしまう淫乱忍者。マタタビの香りと雄の淫匂とが、少女の理性をさらなる涅槃へと誘っていく。気丈な美貌は見るもあさましく蕩けきり、恥知らずにも音を立てて肉棒をしゃぶりまくっていた。

（だ、ダメ。逆らえない。悔しいけど……おちんちん美味すぎて、我慢できない！）

人の理性では拒絶しているのに、獣の本能がそれを欲してしまう。屈辱の涙で瞳を潤ませながらも、ナリカは積極的に舌を絡め、恥知らずな男根奉仕に没頭する。

「ヌウウッ……ヌ、ヌンジャ……アアア！」

そんな従順な牝猫の舌使いに、ゲニンは気持ちよさげな声をあげ腰を振った。さらなる快楽を得ようと獲物の頭をわしづかみ、自ら激しく腰を振って口壺を責め犯す。

「ふにゃ、はむ、んちゅっ！　ひにゃあ、は、激し……んちゅ、にゃ、んちゅ、ちゅる！」

性器同然に口壺を犯しまくるイマラチオに、少女はネコミミを震わせて苦悶した。喉奥を抉られる痛みに悶えながらも、発情した肉体は男の要求に従順に応えてしまう。

「はむっ……んちゅ、んちゅ、じゅるっ！　ちゅむう……ちゅ、じゅる、じゅるる！」

幼くして、ナリカの舌使いは確かなものだった。普段はそれを気恥ずかしく思っているが、龍輪功で磨かれた性技は、しっかりとその身に刻み込まれているのだ。たっぷり涎をまぶしながら小さな舌を懸命に閃かせ、カリ裏や鈴口といった感じやすい部分を刺激する。淫靡な舌使いに反応し、大量の先走りが溢れ出した。

「こく、こく……ぢゅるるるっ！　んああ、ぬるぬるいっばい……お、おいしい。おちんちん……またたび……こく、こく。ふにゃあああ、も、もっど……んちゅ、ちゅる！」

パタパタと尻尾を揺らし、童顔を綻ばせて先走りを啜りまくる。媚薬を嚥下するたび肉体は加速度的に発情し、溢れる愛蜜は太ももをねっとり濡らしていた。

「フン、なんとも淫らな舌使いだ。それもくノ一としての修練の賜物だろうが……クククク。そんな舌使いで搾り取られては、盛った犬はひとたまりもないだろうな」

「ふにゃああ……え、え……にゃあああ？」

おしゅぶりに夢中になっていたナリカは、その声で我に返った。お口の中で、男根がビクビクと脈動を早めている。ゲニンの卑根が、今にも口中に吐精しようとしているのだ。

「フフフ。望み通り好物をくれてやる。一滴も零さず感謝して飲み干すのだぞ牝猫！」

「や、い、いや……いやあ！　そんなにや、お、お口の中なんていやっ……にゃふううう！」

口内射精の嫌悪感に、耽溺していたくノ一も一瞬意識を取り戻した。イヤイヤとツイーンテールを揺らすナリカだったが、しかし発情しきった舌の動きは止まらない。それどころ

か量を増した先走りもつと欲しくて、ねだるように竿をしゃぶり続けていた。

「はむうっ……んちゅ、ちゆる、じゆるっ！ うあああ……で、出そうになつてる。おちんちんビクビクして……またたびいっぱい……にやうう、う、嬉し……ぢゆるるる！」

（やつ……いや、いやあ!? 私、な、なんて事言つて……どうして、こんな……!）

精神とは裏腹、身体は肉の悦びを求めてしまふ。全身に男根を擦り付けられ喉奥深くにまで男根を突き込まれるたび、抵抗しようという意識さえ消えていく。そして――、

「ゲヌウウ……ヌ、ヌンジャアアア！」

ドボ、ドボドボドボドボ！ 一際凶暴な咆哮とともに、ゲニンは大量の精を放った。グイッと髪を引き寄せ、吐き出せないようにして直接咽喉に精液を注いでいく。

「ひ、ひにやあああ……にやああああああん！ やああ、お口の中……んみゅうう！ こ、こんなにいつぱひ出すなんて……はむうう、んにゅう、じゆる、んみゅうううう！」

限界まで突き込まれながらの口内射精に、喉が塞がれ息ができない。可憐な童顔を真っ赤にしながら、ナリカは涙を流し直出しザーメンを嘔下し続けた。

「ヌ、ヌンジャアア！」「ヌウウ、ヌンジャアア！」

と、口内射精を決めた先達に続き、他の陵辱者も次々と精を放ち始めた。

「ひっ……にや、にやつふあああああ!? やあああ、そ、そんなにやとこまで……んふううっ！ みるくっ、みるくいつぱひ……ひやああ汚れちやう、か、かけにやいれえー！」

精飲中にいきなり大量のザーメンをぶっかけられ、驚愕に目を見開く変身少女。だが逃

げないように頭はガツシリと押さえられ、尻餅をついた体勢からではどうしようもない。四方八方から浴びせられる白濁のシャワーが、容赦なく閃忍のコスチュームを汚していく。「ひああああ……い、いやっ……こく、こくっ！ んぶああまだ出て……ぶあああっ、ぢゆる、ぢゆるっ……ごくん！ ひっ、お。お顔とおっぱいはらめ……こく、ぢゆるううー！」

ゲニンの射精量は凄まじく、長く長く射精は続いた。その間息をする事さえ許されず、ナリカはひたすらに白濁液を啜りながらザーメンの雨を浴び続けた。白いほっぺも桜色の乳首も鮮紅の忍装束も、すべてが汚らしい白濁色へと染め替えられていく。嫌悪していた雑魚の精液にまみれながらも、幼貌に浮かぶ表情は、うっとりとした蕩けきっていた。

（うあっ……す、すごい。おちんちんのまたたびみるく、すっごく甘い……。ゲ、ゲニンなんかのおちんちんなのに、大好きなケーキよりも、ずっと甘くて美味しいのお！）

暗示をかけられた牝猫は、マタタビ入りの精液を極上の甘露として感じているのだ。甘いもの好きな女の子は全身を生クリームにまみれさせ、大好きなジュースを飲み続ける。

「はむ、んじゅ、んみゅうう！ お、おいしいのお……こく、んぐ、んぐっ！ はにゃあまだ出てるう……おいしい、おいしいおちんちんみるくおいすぎるよおー！」

マタタビが回り、圧倒的な陶醉感に溶かされる。あまりの快感に、子宮が蕩け――。

「ひにゃああ……イ、イクッ……イクウ！ せ、せーえきおいしすぎてイっちゃう……こく、こくっ！ こんにゃあああ、お口で……お口だけでイっちゃうにゃあああー！」

ぶしゃ、ぶしゃ、ぶしゃあああああ！ 触れられてさえもない秘唇が決壊し、おしっ



こを漏らしたかのように大量の愛液が潮を噴く。背筋をびいんと伸ばしきり、未発達な四肢を切なげに痙攣させながら、あさましい嬌声をあげる変身ヒロイン。発情しきった牝猫は、大好きなマタタビの匂いと味だけで快楽の絶頂へと押しやられてしまったのだ。

「こく、こく、こくっ……んにゅ、ふにゃあああ……ん。ら、らめえ……こく、こく。あ、頭がくらくらくらしてえ……ちゆるるるっ。も、もうだめ……にゃあああ」

絶頂が終わり、痙攣していた肢体からぐったりと力が抜ける。もはや座ったままの姿勢を保つ事もできず、ナリカは四つんばいで地面にへたり込んでしまっていた。それでも舌だけは物欲しげに動き、射精を終えて引き抜かれたペニスへ物欲しげに伸ばされていた。

「にゃ、にゃあああ……もつと。それえ……またたびみるく、もつと飲ませてえ……」

半開きの唇から飲み残しの精液を吹き零し、恥知らずに哀願する。アクメの余韻を振りきれてもいないのに、瞳を潤ませて新たな男根をねだるその姿は、牝猫と呼ぶほかない。

「フン、ようやくくらくらしてきたな。そうだ、貴様は男狂いのあさましい牝猫なのだ」

「ふにゃあああ……あ、あ。そ、そんなにゃあ……ち、違うう。私……わ、私はあ……」

いやらしい言葉責めにプライドを逆撫でされ、持ち前の負けん気が蘇る。怒りと屈辱を糧に意気を振り絞り、ナリカは必死で人としての言葉を紡いだ。

「違わん。貴様は牝猫だ。男のモノさえあれば他はどうでもいい、淫ら極まるケダモノだ。それが証拠に……フフフフ。貴様のここは、これほどまでに男を求めているぞ」

「ち、違……わたしそんなにゃ……にゃああああつそつそはらめえええ！」

必死で振り絞った反論も、調教師によって一瞬で全否定される。それでも抵抗しようとする少女の言葉は、しかしあさましい嬌声に取って代わられた。

「ヌウウウツ……ヌ、ヌンジャ。ヌンジャアアアア！」

四つんばいで這い蹲った少女の背後から、ゲニンの一人がペニス突き出したのだ。いきり立った巨根の先端が、バックから少女の秘裂へと押し込まれる。

「ひっ!? ら、らめえっ……そこっ、イ、イったばっかにゃのに……にゃふううう〜！」

ヌルツ、メリ、メリメリメリ！ 幼げな秘裂に、深々と剛直が挿入される。潤みきった秘裂を真後ろから貫かれ、ナリカは四つんばいの姿勢で獣のようによがり泣いた。

（あ、あっ……あああ！ 入ってくる……太いの、どんどん、入ってきちやう……!）

拒絶の声に反し、すでに二度の絶頂を迎えている発情壺は、男を迎え入れる態勢を整えきっていた。肉付きの薄い幼唇は無垢な外見からは信じられないほど大きく開ききり、赤い粘膜を剥き出しにして自ら男根を招き入れていった。

「ひっ……あ、あ、あああっ！ 深い……いやあ、イ、イったばっかにゃのに乱暴にしにゃいれえ……お願い、も、もつとゆっくり……にゃは、にゃああああああ〜！」

「ヌウウツ……ヌ、ヌンジャアアア！」

生意気だった童顔を惨めに綻ばせ、涙を流し哀願する牝猫忍者。だが人の哀願など、狂犬に通じるはずもない。犬の姿勢で閃忍を刺し貫くと、ゲニンは乱暴に腰を振ってケダモノじみたピストン運動を開始した。中に溜まっていた絶頂愛液が膣内で攪拌され、ぐちゃ

ぐちゃと淫らかな音が木霊する。

「ひにやあ……にやあ、にやあああ！　そ、そんなにやに激しく……ひああ、あああ〜！」
(うああつ……ダ、ダメ！　い、今は敏感すぎるのに……そんなにされたらあ……！)

ケダモノじみた姿勢でのストロークは、未成熟な膣の最奥にまで届いていた。本来なら入れるだけでも限界の巨根が、愛蜜のヌメリを借りて易々と最奥にまで滑り込む。絶頂直後の鋭敏すぎる肉腔を容赦なく虐められ、ナリカは背中を仰け反らせ悶絶した。

「ひあ、ひんっ……ひん、ひんっ！　や、やめてええ……そんなに動いちや……ふにいいっ！　もう動かないでえ……こ、こんなにやの壊れる、壊れちゃうからあ〜！」

あまりに激しい責めに、ガクガクと身体が揺れる。ぼろぼろと涙を流し、ネコミミをへたり込ませて許しを請う被虐のヒロイン。その惨態は、勝気な閃忍と同一人物とは思えない。

「フン、何を言っているのだ。動いているのはお前の腰のほうだろう牝猫」

「ひ、あ、あああつ!?　そ、そんなにや……ふにやあああああつ!？」

冷酷な閃忍の声に、はっと気付かされる。少女はガツンガツンと繰り返されるストロークから逃げる事をせず、逆に自ら腰を振っていつそう激しい摩擦を貪っていたのだ。

(そ、そんなつ!?　私の身体、どうなっちゃってるの？　こんな……こんなのイヤなのに)

「い、いやあああつ……動いちやうう。腰があつ……にやん、にやん、にやんっ！　後ろからされるのすごすぎて……ひあああああ、腰が、腰が止まらにやいいのおお〜！」

「ククク、流星は男漁りしか能のない盛りのついた牝猫だ。自ら搾り取るように動きおつ

て……前の口だけでなく、後ろの口でもマタタビを欲していると見える」

「にやああああ……そ、それは……ふにや！ ま、またたび……欲しい……い」

咄嗟に拒絶しようとするナリカだったが、『マタタビ』という単語を聞いただけで思考が蕩け、涎が溢れ子宮が戦慄してしまう。少女は加速度的に牝猫へと墮落しつつあった。

（ああっ……ダ、ダメよ。すっかりしなくちゃ……こんな暗示になんて……で、でも）

「ま、またたびい……ふにやああああん！ ほ、欲しいにやあ……ああああん」

瞳はとろんと蕩け、反対に尻尾はせわしなく動きまくる。そのたびアナルパイプが腸内で動き、イボイボに擦られる肛悦に理性を蝕まれた。

獣と人の狭間で悩乱する少女の眼前に、さらなる誘惑が突きつけられる。無数のゲニンが、勃起しきったペニスを無数に突き出してきたのだ。どれもこれも濃密な先走りを零しており、マタタビと精子とが混じりあった最高の媚香が香り立っている。

（お口……ま、また犯される。お口じゅぽじゅぽってされて、いっぱい出されちゃう……）

ゲニンたちの望みを悟り、怯えた表情を見せる変身忍者。だが胸の内では、恐怖や恥辱よりも期待感のほうが大きかった。先ほど直接飲ませてもらったミルクの味を思い出し、可憐な美貌が淫らに蕩ける。溢れてしまう涎を、ナリカはごくりと喉を鳴らし飲み込んだ。

「くふうう……にや、にやあああああ。ふにやあ……あ」

「待て貴様ら。お預けだ」

だが、ここに来て怪忍の策は奸悪だった。鞭音に従い、訓練された犬たちはピタリと動か

なくなっていた。バックから少女を貫いていた男も、子宮に亀頭を当てたまま腰を止める。
(えっ……な、何？ 犯さないの……おちんちん、食べさせてくれないの……?)

予想外の中断に、安堵など感じなかった。物足りなくて物欲しくて、考えるは陵辱の続きばかり。挿入されっぱなしの膣は内容物を咀嚼するかのように痙攣し、膣壁をざわめかせて肉棒を誘惑する。細腰は勝手に動き、クィクィとお尻を振っておねだりする。だが牝猫がどれだけアプローチをかけても、忠犬は決して誘いに乗らない。

「ふにゃあ……ど、どうして？ なんでやめちゃうの……もつとしてくれにゃいのお？」
不満げに唇を尖らせ、甘ったるい猫なで声を零してしまふ。苛烈すぎる責めから一転、完全にお預けを食らわされ、ナリカは焦れっさに身体をよじり煩悶した。口に触れるか触れないかの場所に位置する剛莖が、あまりに美味しそうで目に毒だ。無意識のうちに口を開けた瞬間、ゲニンはさつと腰を引いた。逃げるご馳走を啜え込もうと首を伸ばすも、バックから貫かれ固定された身体ではそれ以上前進できない。

「ふにゃあ……ど、どうして、にゃんでえ？ な、なんでしてくれにゃい……こんなに、こんなにゃのって……ふみいいいいい」

目の前にあるのに、身体の中に入っているのに、何もしてくれないなんて——もどかしくて焦れったくて、とても正気でいられない。不機嫌な猫のように尻尾を立て、涙目で雄肉をねだる淫乱牝猫。数秒が経過しただけなのに、もう気が狂ってしまいそうだった。

「躰のなっていない牝猫だな。他人にモノを頼む時は頼み方があるだろう？」

「ふ、ふにやあああ……あああ？」

朦朧とした意識の中、調教師の音が耳を打つ。幸か不幸か、ラオ將軍が何を言っているのか理解できる程度には、まだ人としての理性が残されていた。

（そんな……わ、私におねだりしろって言うの？ こんな雑魚に……ゲニンなんかにも！）
最後まで捨てきれずにいたプライドが、蕩けかけた心の中で軋みをあげる。責めを一時中断されたおかげで若干戻っていた理性が、勝気な少女にそんな屈辱を許さなかった。

「い、いやっ……ふ、ふざけにやいで！ そんな惨めな真似……私が……こ、この私が、どうしてゲニンなんかにおねだりしなくちゃいけない……あ、あ、あああ〜！」

じゅぶ、じゅぶ、じゅぶっ！ 浅く腰を動かされ、子宮をゴリッと抉られた。焦れきつた肉壺はそれだけでも絶頂に達しかけ、抵抗の言葉も蕩けてしまう。だが許されるのはそれだけだ。ゲニンはすぐさま動きをやめてしまい、甘美な昇天を許してはくれない。

「くふうう……ま、またお預けにやんて……いや。こんなにやのずるい……ひ、卑怯……」

「卑怯だと？ 心外だな、俺ほど誠実な飼い主もないぞ。おねだりするだけで餌をやると言っているのだから……飼猫の分際で、聞き分けがないのは貴様のほうだろう」

「くふうう……そ、そんなにや、そんなにやの……ひあああ、じ、焦らさにやいれ……え！」

悩乱する獲物をいつそう追い詰めるべく、無数の犬どもが緩やかな愛撫で官能を焦らす。触れるか触れないかの位置で乳首をさわさわとタッチされ、匂いだけは嗅がされるのに、おしゃぶりは許されない。膣内のペニスは、物足りないストロークしかしてくれなかった。

(あ、熱い……つくうう。む、胸が……装束と擦れて……くううう！)

零れんばかりに熟れた豊乳は、その感度も人並み外れている。火照りを増した乳房は衣装の摩擦だけで熱っぽく疼きを増し、乳首までがピンピンに勃起してしまっていた。布地と擦れるたび痺れそうになってしまふ敏感豆に、突如新たな刺激が走った。

「ふう、ふう……あ、ああああっ!」

ちゆる、ちゆくっ！ 柔らかく湿った何かが、勃起した乳頭に食いついた。同時に腐肉じみた粘塊が乳肌にも吸い付き、ぬるり、ぬるりと這い回っている。まるで幾つもの肉舌に、豊満な肉峰を嘗め回されているみたいだった。

「くっ……ふ、ううううっ！ うああ……な、何だ。これは……ま、まさか……あ!」

知らない汚辱ではなかった。虜囚の日々に刻み込まれた、異形の陵辱。これは、その中でも最も辛く、そして忘れられない快楽を両の肉丘にもたらしてくれた――。

「く、くふうう……うあああ。む、胸が……ああ!」

と、『何か』に責められている乳房の奥で、ドロリと何かいやらしいものが流動した。不気味な肉塊に乳頭を噛み締められ、にちゅばちゅばと吸われるたび、乳頭がむず痒く疼く。乳腺が開きかけて、その奥からトロリと何かが零れそうになってしまふ――。

「くふうう……う、ううっ！ ダメだ……そ、そんなに吸われては……あ、溢れ……!」

ちゅ、ちゆるちゆるちゆる！ 『何か』に強く乳首を啄まれ、溢れそうになっていたものを乳奥から力任せに吸引される。母乳を求める乳飲み子にも似た吸引行為に、母性たつ

ぷりの巨乳は『あの時』と同じように応えてしまっているのだ。即ち――、

「で、出る……あああああ！　こ、このままでは……ひああああ、出てしま……う！」

ピュッ……ドビュ、ドビュッドビュドビュ！　勃起しきった肉豆から、大量の白濁が噴出した。ドロリ、と粘った感触が乳肌を濡らし、甘ったるい乳匂が鼻を突く。目を瞑っていてもわかる――熟れきった巨乳果は、両方同時に母乳を噴出してしまっていたのだ。

「うあ、あ、あ。そんな……ち、乳が出るなど……ああ。こ、これはやはり……！」

「ククク、懐かしいじゃろう。これはただの幻覚ではない。主の記憶より呼び起こした過去の再現……お主が最も望んでいる淫辱を、そのまま再現してやったのじゃ。その熟れた巨乳を母乳体質に改造されての吸引愛撫、たいそう気に入っていたようじゃのう？」

（ううう……つく！　や、やはり……！）

両の乳首からびゅくびゅくとミルクを零しながら、スバルは悔しげに唇を噛み締めた。推測通り――この幻覚は、かつて味わわされた淫辱をそのまま再現したものなのだ。

ノロイの妖力は、現世の理を容易く捻じ曲げる。囚われの閃忍はいかな責めにも快楽を覚える淫乱な肉体に改造され、昼夜問わずの拷問に数えきれない絶頂を極めさせられた。さらにそれだけでは飽き足らず、両の胸房は肉悦に应じて乳を噴出す、あさましい母乳体質に改造されてしまったのだ。そして、囚われのくノ一を責める乳飲み子の正体は――。

「はあ、はあ、はあ……う。ああ……やはり、こいつらか……！」

射乳の淫悦に意識が蕩け、うっすらと瞳が開かれる。潤む視界に映るのは、母乳にまみ

れ脈打つ白い乳峰。そしてそこに無数に吸い付いた、不気味な肉ヒルの群れだった。

牢に囚われている間、この肉蟲たちは常にスバルの身体に張り付けられていた。這い回られるだけでヌルついた粘液が染み込まされ、そのおぞましさに性感を擽られる。特に柔らかな乳肉は好物だったようで、常に揉まれ吸われ嚙られ続けてまともな睡眠さえとれなかつたほどだ。そんな貪欲な怪物が、この程度の餌で満足するはずがなかつた。

「うああ、あ、あ……あああ！　くうう、ま、また吸われ……ん、んおおおお〜！」

じゆるっ！　じゆるっ！　じゆるじゆるじゆるじゆる！　すでに噴乳を終えているにもかかわらず、肉蟲は吸引をやめなかつた。乳腺内に残った残滓まで残さず貪りつくそうと、猛烈な勢いで吸引を続行する。双膨に纏わり付いている他のヒルたちは、豊満な乳肉にそのままむしゃぶりつき、乳肉ごと零れたミルクを啜りまくる。何十という肉口に鋭敏な果肉を嚙られ続け、痺れそうな乳悦がまったく終わらなかつた。

（こいつら……なんと執拗なのだ……ああ。あ、あの時と、まったく同じだ……！）

執拗な乳辱に、淫辱の記憶を思い起こされる。この肉蟲たちの食欲さは、決して満たされる事はない。一度餌にありつけば、昼夜を問わず延々と啜り続けるのだ。その執拗さによってもたらされる終わりなき乳悦は、忘れようとしても忘れられるものではなかつた。

しかも、この淫蟲たちの恐ろしさはその旺盛な食欲だけではない。軟体から放たれるドロドロした粘液は、肉を疼かせ官能を蕩かせる媚薬性の毒を含んでいた。柔肉を嚙られながら肌奥にまで擦り込まれるたび、ただでさえ感じやすい巨乳はいつそう敏感になり、淫

蟲の愛撫に蕩けそうになってしまふ。その上毒液の効果は、ただの増感では終わらない。

「はあ、はあ、はああ——……あ！　ダメだ……す、吸うなあ。そ、それほど強く吸われれば……んくうう、ま、また……また乳が蕩け……くうううう！」

漆黒のポニーテールを揺らし、切なげな声をあげる変身忍者。媚薬の回った肉峰をしつこくしつこく吸われ続け、ゾクゾクと危険な快感が止まらない。感じやすすぎる急所をヒルの口内でコリコリと噛み潰され、勃起しきった乳首が再び弾けそうになってしまふ。

(い、いかん！　このままでは……また、また出……！)

ドロリ、とあの予感が駆け巡る。食欲な要求に屈し、またしても母乳が搾られる——。

「う、あ、ああつ！　い、いやだ……また、また……あつはあああああああ——！」

両の乳房が同時に決壊し、大量のミルクが噴出した。溜め込まれたものを吸い出される爽快感に、舌を突き出し悶絶する黒髪美女。しかも二度目の射乳がもたらす快感は、先ほどの比ではなかった。噴乳と同時に、魂が掻き消えるほどの絶頂感が子宮にまで駆け巡る。

「くひいいいっ！　ひい、ひい、ひいひいっ！　こ、これは……これはダメだ……んあああああつ！　乳首っ、乳首イクッ……おっぱい、イってしまおううう——！」

ぶしゃああああああ！　乳首と同時、女の園も決壊した。子宮が蕩け、大量の愛液が勢いよく潮を噴く。その勢いたるや、発射される母乳に勝るとも劣らないほどだった。

「はあ、はあ、はああ……なんとという失態。これでは、あの時と同じではないか……！」
蟲ごときにイカされてしまった敗北感に、気高き閃忍は悔しげに歯軋りした。淫蟲の魔

毒がもたらすもう一つの効果——母乳体質の淫肉は、射乳と同時に恥知らずな絶頂を食つてしまうのだ。溜め込んだものを吐き出す快美な爽快感は、男の射精にも等しい。

「どうじゃなスバル？ 久方ぶりに味わう射乳絶頂の悦びは、また格別じゃろう？ 今回も簡単に達しおつて……やはり、この悦びを忘れられずに望んでいたと見える」

「だ、だまれ炎斎……イ！ 誰がこのようなものを望み……うああ、また吸われ……！」

咄嗟に反論する気丈なくノ一だったのが、肉体は正直だった。幾十回と繰り返された射乳調教により、スバルの乳首には射乳の悦びがたつぷりと刷り込まれてしまっている。クセになっていたあの快感がどうしようもなく思い出され、強気な態度が保てない。いったばかりだというのに早くも勃起を回復させている淫乱果実を、肉ヒルは貪欲に啜り続けた。

「うああ、あ、あああ！ ダ、ダメだ……やめろ！ 今は……今はイったばかりなのに……やめてくれ。また、また吸うなど……くううう、つ、強い……いいいい！」

ぢゅばっ！ ぢゆる、ぢゆるぢゆるぢゆるぢゆる！ はしたない音を立てながら、乳首も乳房も同時にしゃぶられる。濃密な乳匂に食欲をそそられ、肉蟲の咀嚼はいつそう強くなっていた。あまりの激しさに蒼い装束がビリビリと破られ、勃起しきったピンクの乳豆が露出する。守るものなく剥き出された急所へ、ヒルの口がゾブリと喰らいついた。

「うああ、や、やめ……んああああっ！ 乳首、乳首はダメだ……くふううう！ イ、イったばかりなのに……くうう、ちよ、直接吸うなど……ああ、や、やめてくれえ！」

強気な美貌に、怯えが走る。射乳直後の乳首は、射精を終えた男性器同様、怖いぐらい



に感度を増してしまっている。そんなところに僅かの休息も許されず、ひたすら執拗に吸われしゃぶられ食られる——辛いほどの連辱に、気丈な忍者も思わず許しを請っていた。だが、何度もこの淫辱を経験したスバルは、誰よりもよく理解している。この小さな陵辱者たちには、いかなる哀願も通じはしないと。

（ま、また吸われる……すぐに乳を食られる。何度も吸われ、イカされてしまう……！）
危険な期待感が、両胸で高まっていく。何度も味わわされた感覚だ、その甘美さは誰よりもよく知っている。そして、自分はそれに決して逆らえないという事も——。

（！ バカな、私は今、何を考えていた!?!）

はっと、気丈な表情を取り戻す。気高きくノ一は、知らずの間に流されつつある自分を強く恥じた。ぎゅっと唇を噛み締め目を瞑り、スバルは再び快楽に抗おうと試みる。

（集中しろ、集中するのだスバル。これは幻だ……意識を集中させれば、このような……）
常人ならとうに堕ちているであろう、終わりなき異形の射乳悦。だが、歴戦の閃忍の心力は驚異的だった。弱い心を刃で殺し、克己心を振り絞って快楽に抗おうとする。

そんな抵抗などまるで無視し、肉蟲どもは陵辱を加速する。吸引は激しくなり、疼く乳首を丸ごと飲み込まれた。母乳の残滓に乳腺を擦られるのが、たまらなく心地よい——。

「く、う、うううう！ ダメだ……た、耐えろ。わたしは、こ、こんな……」

ちゆるっ……くちゅ、じゆる、じゆるっ。ちゆるっちゆるっちゆるちゆる！

「ふあ、ふあ、あああつ！ だめだつ……乳首、乳首敏感すぎて……んっ、んんん〜！」

集中できない——させてくれない。乳を吸われるのが気持ちよすぎて、おっぱいが感じすぎて全然抵抗できない。蒼きくノ一は、悔しげにポニーテールを振り乱し喘ぎ乱れた。

「ククク、無駄じゃ無駄じゃ お主は自分が変わったなどと言っておったが、所詮人は弱いものじゃ。一度快樂の奴隷に堕ちたものは、二度と肉欲には逆らえのじゃ!」

「だ、黙れ! 私は負けぬ……も、もう二度とこのような快樂になど……ああああっ!」

ちゆるっ! ちゆる、ちゆるっ! 両の乳房を同時に吸われ、痛いぐらいの強さで嘔み潰された。痛み混じりの鋭悦に、スバルはたまらず喉を仰げ反らせ悶えてしまう。

(うううっ! し、しつこい……こいつら、や、やはり……なんといやらしい……!)

過去と同じく、肉ヒルの責めは女の泣き所を見事に突いたものだった。乳管に残るミルクをじゆるじゆると吸い上げられ、未だ振りきれずにいる射乳の肉悦をゆっくりと反芻させられる。絶頂直後で火照った乳肉に媚薬性の体液を塗り込められ、淫らな火照りがいつでも冷めない。ちゆば、ちゆばと響く粘音に、いやらしくも聴覚までを犯された。

「くふうう……や、やめる。胸……そ、それ以上は……ふああ、あ、ああ!」

執拗極まる乳虐めに、スバルはたまらず惨めな哀願を零してしまう。そして、そこで意識を散漫させてしまったのがいけなかった。一瞬の隙を狙い、ノロイの呪力が注がれる。

『怨・空縛・産・心崩……怨・空縛・産・心崩……!』

「う、ああ!? し、しまっ……うああああああ!」

集中を絆された無防備な意識に、呪いの言葉が染み込まされた。より勢威を増した陵辱

の幻影が、窮地のくノ一をさらなる淫獄へと誘っていく。

乳房への淫蟲責めはそのままに、新たな淫辱の記憶がそのまま再現される。

「く、うろうう……あ、うぐおおお!?」

ズシン、と重い衝撃が、今度は膣に響き渡った。巨大すぎる質量に、膣の隅々までを埋め尽くされる。とてつもなく太く逞しい肉根が、最奥にまで挿入されているのだ。巨大な剛莖は激しく前後運動を繰り返し、そのたび粘膜が抉られ膣襞が伸ばしきられる。

（お、大きい……太いっ！ なんとという逞しさ……こ、これは……この男根は……!）

蟲たちとはまるで違う、あまりに強く逞しい責め。子宮までを押し上げられ、身体が浮き上がりそうになってしまう。当然、スバルの肉体は覚えていた——この陵辱者の正体を。

「グフフッ！ 何度犯してもきついままだぜ……やはり最高だ、お前の肉穴はよお！」

下卑た蛮声が、耳に届く。同時に、猛烈なストロークで最奥までを突き上げられた。巨大な肉塊に膣穴がぐぐつと押し開かれ、野太い亀頭に天井を擦られた。

「天井を擦るたび子宮がきゅんきゅん泣いてやがるぜ……やっぱりお前はこうやって犯されるのが好きなんだよなあ、淫乱忍者！」

「うああ……そ、そんな……ひぐうう！ ま、またそこ……おおおおお！」

強烈なストロークで、Gスポットを容赦なく蹴られる。野太く膨らんだ亀頭でゴリゴリと急所を抉られるたび、軽い絶頂さえ覚えてしまう。虜囚の勘所を知り尽くした、力強くも熟達した腰技。身体の中から壊されるような快感に、もう目を瞑っていられなかった。

「こ、この腰使い……この太さ、この大きさ……ああっ！ お前は、や、やはり……！」
「グへへへへ！ 久しぶりだなあ雌豚……会いたかったぜえ！」

うっすらと開かれた目に映るのは、予想通りの異形。筋骨隆々たる体軀を誇る、巨大な鬼の姿だった。幻が生み出した大鬼は巨大な腕で真正面からスバルを抱きしめ、腕ほどもある巨大なペニスを深々と突き立てている。これも術による幻覚か、いつの間にか股布は無惨に引き裂かれ、剥き出しの秘唇に巨大な肉棒が突き刺されていた。

「ぐうっ……は、離せ！ バケモノめ……こ、こんなもの抜け……うああっ！」

グッ、と腰を押し出され、子宮口にまで届く巨大な亀頭に天井を擦られる。腹が裂けそうなほどの圧迫感と、それ以上の快美感とに、スバルはたまらず喉を仰げ反らせ悶絶した。幻覚と肉悦に犯された肉体にはまるで力が込められず、鬼の抱擁を振りほどけない。

「連れねえ事言うなよスバル。忘れられなかつたんだろ……この俺様のチンポがよお！」
「毎日犯しても全然飽きずに求めてきやがる、どうしようもねえ淫乱だったからなあ！」

下卑た笑みを浮かべ、口々に語る大鬼ども。ノロイに仕える魔界の悪鬼は、最も恐るべき陵辱者だった。粗暴な外見通り残酷かつ暴力的で、僅かの慈悲も持ち合わせていない。金棒を思わせる巨根は人の性器の数倍ものサイズで、何十発と連続で射精しても尽きない精力を誇っている。何週間も寝る事さえ許されず中出しされ続け、腹が裂けそうなほどの子種汁を注がれ生死の狭間を彷徨った事も、一度や二度ではなかった。過去の惨劇がまざまざと思い出され、かつて虜囚だった閃忍の肉体は、恐怖で反射的に凍んでしまう。

(ハハッ！ 悦べハルカ、俺とお前の子だ。お前の肉体を内側から作り変えてくれるぞ…
…より淫らでより快楽に従順な、あさましい雌豚としてな。さあ、バケモノを産む母として生まれ変わった肉体の淫蕩さを、人間どもを前に見せ付けてやるがいい！)

(うう……そんなっ！ いや、イヤ、イヤイヤイヤ……こんなの、ひ、酷いです……！)

過酷な状況に追い討ちをかける、残酷すぎる現実。倒すべき敵に抱かれ、化生の仔を宿してしまふなんて——あまりのショックに、さしもの氣丈なくノ一も愕然とした表情を隠せない。そして、忍従のヒロインには絶望に耽る暇さえ与えられなかった。

(どうした？ 仲間が大事なら続ける。自ら乳首を挟み込んでシゴけ。股間の張型を自らの手で動かせ。自慰で絶頂する淫らな変態ぶりを、民衆に見せ付けるのだ)

「く、ううう……は、はいっ。わ、わかりました……んんん、くふううう〜！」

涙と嗚咽を堪えると、ハルカは右手で乳豆を挟み込み、根元からシゴくように刺激始めた。同時に左手をパイプにあてがい、そのままゆつくりと奥にまで押し込んでいく。

「ふ、あ、ああっ！ 乳首い……んんん、バ、パイプ……はあ、ふ、太い……いっ！」

入れていただけとはまるで違う、重く深い充実感。亀頭を模した先端部に子宮を突かれ、硬い胴体部分に秘粘膜を抉られる。相性抜群だったノロイの肉棒とは違い、無機質なパイプはひたすらに硬く太く、抜き差しするたび痛みさえ感じてしまう。だが、化生の仔を孕んだ事により増感された肉体は、その痛みにさえ被虐的な幸福を覚えてしまっていた。

「ふああっ……く、い、い……いっ！ だめえっ……こ、これ……おかししい。か、感じ

すぎちやうの……はあああつ、身体が燃えてっ……くう、と、とろけちやう……う！」

最初から鋭敏だった肉豆は怖いぐらいに感度を増し、抓るたびに稲妻にも似た快楽が脳天にまで駆け巡る。すでに子を宿している子宮をパイプで突かれれば、中と外両方からの「圧迫感にたまらないほど感じてしまう。

「はあああつ……な、なにこれ……す、すごっ……すごいです……う！ ダ、ダメですっ……こんなの……あ、あつ！ 感じすぎちやう……お、溺れちやう……ううっ！」

公衆の面前で激しくオナニーを繰り返し、恥知らずな声で喘ぎまくる淫乱くノ一。一秒ごとに胎内侵蝕が進み、加速度的に増す肉悦にまったく逆らえない。じゅん、じゅんと子宮が軋み、湯気だった本気汁が太ももにまで垂れ落ちる。清楚な美貌は絶望に打ちひしがれながらも、倒錯した快感にうっとり溺れつつあった。

「すっげえ……公開オナニーで本気になってやがるぜ。閃忍って、ただの変態なんだな」
一秒ごとに淫らさを増す痴態、音を立てて崩れてゆく偶像。正義の変身ヒロインに対する憧憬は完全に反転し、裏切り者に対する悪意と憎悪に取って代わられていた。

「あ、あつ、あああつ！ 違うっ……ち、違うんです。これは赤ちゃんのせい……じよ、上弦衆は本当は……ふあああつパイプ動いてるう、乳首っ、乳首感じちやううう！」

ブブ、ブブブブブ！ 釈明しようとした瞬間、パイプの振動がさらに激しさを増した。同時に乳首に刺されている忍針にも妖力が注ぎ込まれ、小刻みな振動を開始する。感じやすすぎる乳腺を硬い鉄塊に穿り返され、ハルカは喉を仰け反らせ絶叫した。

（誰が勝手に喋っていいと言った？ まだ立場がわかっていないようだな……お前は俺に絶対服従を誓ったのだ。貴様に許されるのは、こいつらの前で痴態を晒す自慰行為のみ）
支配者の声が脳裏に響き、その息子の妖力が肉体に浸透する。化生の術を受けた淫具は、約束を破った閃忍にお仕置きするように淫らな動きを加速させていく。

「ひう、ひう、ひうううっ！ やめっ……バ、パイプ強くしないで……ひああああっ乳首も刺激強すぎますっ、こ、これダメっ……か、感じすぎちゃいますううっ！」

容赦なく振動を繰り返す淫具にお仕置きされ、辛いほどの快感に打ちのめされる。暴れまわるパイプを引き抜こうとするも、結果逆方向に膣壁を抉られてさらなる快感に悶えてしまう。乳針の振動に至ってはどう止めればいいのかさえわからず、鎖帷子の食い込んだ巨乳をブルンブルンと揺らす事しかできなかった。

「くふううっ……す、すごい……すごい……いいいっ！ こんなあつ……あ、暴れてる……ふあああんっ！ お、奥まで届いて……ふあああ、ち、乳首も……いい……！」

増感された肉体を襲う、辛いほどの快樂地獄。コリコリと肉豆をシゴき、野太いパイプの抜き差しを続けながら、ハルカは舌を突き出し悶絶した。懸命に快樂に抗うその姿は、しかし、事情を知らない市民からはオナニーに没頭しているようにしか見えない。

「うわっ……すっげ。なんて激しいオナニーだよ……ここまで愛液がしぶいてくるぜ」

「こんなエロい道具入れたままで戦ってたのかよ……本物の変態じゃねえかよ！」

（い、いやっ……いい、言わないで。見ないで……こんな、は、恥ずかしい姿……！）

容赦ない罵倒に、人としての尊厳までを辱められる。羞恥と屈辱に身悶えるハルカだったが、もはや釈明は許されない。仲間たちを救うためには、あさましいオナニー姿を見せ続けるしかないのだ――。

「そ、そうです……そうなんですっ！ ハルカは変態です……ふ、ふっといパイプでアソコ慰めながら、針で敏感になった乳首をコスチュームに擦り付けて……あん、あんっ！ 戦いながらエッチな気分になってた……変態マゾのくノ一なんです……ううゝッ！」

ノロイの言いつけ通り、自らの言葉で自身を貶め、存在意義を否定する。普段の凛々しい姿とは真逆の淫ら極まる痴態が、その言葉に否応なく説得力を与えてしまう。

（あ、あああ……も、申し訳ありませんタカマル様。上弦衆の名に泥を塗ってしまった……私、取り返しつかない事を……！）

気高き上弦の誇りを、自らの手で汚している。仲間を救うためとはいえ、上弦忍として許される事ではない。たまらない背徳感と罪悪感に、少女の純心が軋みをあげる。だが、零れ落ちた涙の真の意味を窺い知る者は、その場には一人もいなかった。

「おいおい、涙まで流して悦んでやがるぞ……人前でオナニー見せて、なじられるたび感じてやがるのか。本当にどうしようもないマゾ野郎だ！」

「怪忍に負けて犯されるのだから、内心喜んでたに違いないぜ……いや、負けて犯されるのが楽しみで戦ってたんじゃないのか、この淫乱変身ヒロインどもはよお！」

裏切られた衝撃と、ノロイの呪術で煽られた邪心。悪意は悪意を呼び、群集心理が膨れ

上がった悪感情をさらに成長させていく。人々は口汚く閃忍をなじり、卑下していた。

（そ、そんな……酷い、酷いですっ！ みんな、犯されたくて戦ってたなんて……）

自分はどれだけ嘲笑われても仕方ない。だが仲間思いの少女にとつて、戦友まで貶められるのは許せなかった。たまらず声を張り上げようとした瞬間——ブ、ブブブブ！

「ひ、ああああつ!? そんなあつ、ま、またバイブ強く……んおおお、おっほおお〜！」

またしても約束を違えようとした愚者に、化生の淫具が容赦ない折檻を加える。極太バイブはさらにピッチを早め、子宮奥にまで轟く振動で身体の中を虐められた。乳刺針は苛烈な振動に加え、ビリビリと電流まで流して鋭敏な乳腺を責め苛んでくる。

「ヒイ、ひい、ひっいいいいい！ し、痺れちゃうっ……乳首、乳首感じちゃうっ！
これはっ、これはダメえ……ごめんなさい、み、皆さんの言う通りですうう〜！」

文字通り稲妻に撃たれたような、鋭い乳悦。乳芯が蕩け、意識が明滅して消し飛びそうになってしまふ。苛烈すぎるお仕置きに、ハルカは長髪を振り乱してよがり悶えた。

（ククク、貴様に否定は許されない。守るべき愚民どもに、真実を教えてやれ）

「くうううっ……は、はひっ……はひいひい……いいひいひいんっ！」

ビリビリと痺れるような快感で、ろくに呂律も回らない。ガクガクと腰を振りたくりおっぱいを震わせながら、淫辱のくノ一は震える声で人々に宣言する。

「み、みなさんの言う通りですっ……はひい、ひいひいんっ！ ハルカはっ……わ、私たちは負けて犯されるのが大好きなんです……ひあ、ひあんっ！ い、今もノロイ党と戦っ

て……はあ、はあ、はああつ！ 犯されたくて、負けて犯されるのがクセになっちゃつて……ま、また犯して欲しくて、私たちわざと負けちゃいましたああ〜！

ぼろぼろと涙を零し、恥ずかしすぎる性癖を暴露する。たまらない恥辱と、それ以上の罪悪感が純真な心を引き裂いた。

（ごめんなさいナリカさん、スバル……あなたたちの名誉まで、汚してしまつて……！）

ボルテージを増す衆生の糾弾を受けながら、ハルカは宙に映し出された仲間たちの姿を見る。だがそこに映っていたのは、彼女が知っている気高き閃忍の姿ではなかった。

『ふにゃああ、またたびみるく美味しいよお、おちんちん気持ちいいよお……にゃああああ、し、尻尾ずぶずぶされりゆのいいのお……ふにゃ、にゃふうふう〜！〜！』

『しよ、触手すごい……うあああ、お、おっぱいまた出てイクッ……んおおおお！ ダ、ダメだつ……おっぱい搾られてイクの、き、気持ちよすぎる……うううう〜！』

正義に燃えていた瞳を快楽で曇らせ、気丈な美貌をあさましく媚びさせて。悪を倒す刃を振るうための両手で肉棒に奉仕し、鍛え上げられた忍の肉体で雄の欲望を受け止め——ナリカもスバルも、完全に快楽に溺れきっている。

（そ、そんなつ……二人とも、う、嘘……！）

愕然とするハルカ。信念のために戦う正義のヒロインなどいない。そこにいるのは、自分の言葉通り、敗北して陵辱される事に女としての悦びを覚える二匹の雌豚だけだった。

（ナリカさん、スバル……あ、ああつ。信じていたのに……二人とも、こんな……！）

普段見た事もないようなあさましいアへ顔、仲間の前では決してあげない媚びきった嬌声。二人とも抵抗する事を諦め、完全に肉悦に溺れきっている。信じていた仲間たちの墮落した姿を見せ付けられ、黒い衝撃に心を侵される。

ハルカの気高き強さは、仲間との信頼に裏打ちされたものだ。だが、それが今、目の前で音を立てて崩れている。自分を支えているものが、心の支えが折れてしまふ――。

（ああ……ナリカさん、すごく嬉しそうな表情でおちんちん舐めて……いやらしい。スバル、あんなにたくさんの触手に犯されてるのに、母乳まで出して気持ちよさそうに……）

「くうっ……あ、ああっ！ 二人とも、ま、負けて犯されてるのに……き、気持ちいいんですね……私と同じ……ん、んんっ！ 変態……淫乱マゾなんですわ……っ！」

市民たちが自分に抱いているのに同じ、黒い感情が心に沸き上がる。そして、そんな悪感情こそが、人を呪う化生によって最高の滋養。ドクン、と胎内でノロイの子が大きく身じろぎ、溢れ出した魔力がいつそう母体の心身を淫らに染める。

「ふくうう……あ、あ……あああっ！ だめえっ……こ、こんな事考えちゃいけないのに……ど、どうして……ゾクゾクしちゃいます……うううっ！」

倒錯した感情が理性を犯し、快樂とともに冷静な判断力を奪っていく。纏るべきものもなくし魔に犯されたヒロインは、急速度で魔悦に傾倒しつつかつた。

「くうううっ……お、おっぱい……くふううん！ ち、乳首気持ちよすぎて……うああああ、あ、あ、アソコも激しいの……パイブずぶずぶするの、き、気持ちいい……いいー！」

痺れる乳首をこねくり回し、暴れまわるバイブを掴んで激しくピストンを繰り返す。仲間たちがそうであるように、快楽を否定せず肉の悦びを享受する。命令以上の淫らさで、奔放に自慰行為を見せ付ける。激しさを増したオナニー姿に、人々の熱視線が絡みつく。

（あ。あつ、ああつ！ 見られています……いやらしくオナニーしてるところ、み、みんな見えます……見られちゃってるのに、恥ずかしいのに、やめられない……い！）

羞恥心と背徳感が、マゾヒスティックな興奮を加速させる。元より快楽に従順すぎる、開発されきったクノ一の肉体だ。心が屈してしまえば、後はどうしようもない——突き刺される視線にさえ自虐的な恍惚を覚え、さらに官能が昂ぶっていく。

（あ、あああつ。ダメえ……き、気持ちいいです。見られながらオナニーするの……は、恥ずかしいのに、すごく感じちゃいます……う！）

寂しい夜はタカマルの事を想い、一人自らを慰めるハルカだ。自分の肉体のツボは、誰よりも自分がよく知っている。ピアッシングされた肉豆をコリコリと虐め、形が変わるぐらゐに強く引つ張つてやる。少し痛いぐらい苛めたほうが、マゾの乳首は悦ぶからだ。

「は、あつ……んんんんっ！ ち、乳首気持ちいい……乳首オナニー、いいのっ！ み、皆さん見てください……わたしも、ナリカさんみたいな変態なんです……はあ、はああああんっ！ スバルみたいに……お、おっぱい虐められていきますから……あ！」

仲間と同時に自分自身を辱め、ゾクゾクと危険な恍惚に身悶える変態ヒロイン。子を孕みながらなおも貪欲に痙攣する子宮口に、野太いバイブを思いっきり突き込んだ。

「ふああ……あつ！ すごいつ……み、見てください、こんなに奥まで入ってます、自分でパイプ入れちゃってます！ 子宮までブルブル震えてっ……す、すごいいい〜！」

ゾクゾクと、危険な悦びが迸る。主を裏切ってしまった罪悪感、仲間を辱めてしまう背徳感、そんな姿を何十人もの人々に見られているという被辱感——狂ったシチュエーションが倒錯した悦びを加速させ、少女の官能を高めていく。もう、我慢できない——。

「イ、イクッ……うう！ み、見てっ……みなさん見てくださいッ！ ハ、ハルカもイキます……あの二人みたいに、負けて犯されて気持ちよすぎてイっちゃいますうう〜!!」

どびゅ、びゅる、ぶびゅるるっ！ 突き出された股間から、大量の愛液が潮を噴く。絶頂した膣が出産時のように脈を打ち、愛液のヌメリを借りて野太いパイプを排出した。

「んふおおお……お、お、おおおっ！ はああ……イっひいいい——！」

圧迫されていた肉袋から異物を吐き出す爽快感に、ハルカは長髪を振り乱し感じ入る。あさましいアへ顔をうっとり蕩けさせ、愛蜜まみれのパイプを出産する変態閃忍。目を覆いたくなるほどに破廉恥なイキ姿は、人々の希望を粉碎するに十分すぎた。

「お、おい……見られながらイッちまったぞ……すげ、やらしい表情……」

「こんなので正義のヒロインを騙るなんて……こいつ、ただの淫乱変態マゾじゃねえか！」

「あへあ……あ、ああ。は、はひ……す、すみません。そうなんです……うううう……」

ぐったりと脱力し、ハルカはその場に崩れ落ちた。悪意に満ちた罵声が、壊れかけた心に容赦なく突き刺さる。意識が磨耗し力が抜け、変身が解けてしまう——。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

三次元
EDDREAM MAGAZINE

魔法少女沙綾の淫靡も厭うるよ!

今号は 催

偶数月 17日発売

vol.63 04
2012

三次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

魔法少女沙綾の淫靡も厭うるよ!

奇数月 12日発売

魔法少女沙綾
てらつくす

魔法スクールカンパニー?

コミックアンリアル

フェチをテーマに突き抜ける作品群!!

フェチをテーマに突き抜ける作品群!!

コミックプリズム

2・6・10月 下旬発売

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

メガミクライシス

奇数月 中旬発売

浮気に堕ちるアンソロジー!

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

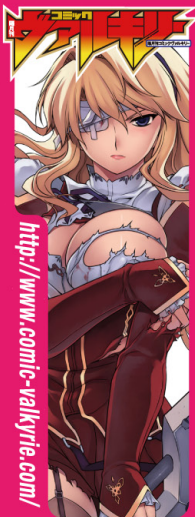
※いずれも18歳未満の方は購入できません。



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!